

「仲間はずれ」「無視」のいじめ解決に向けて指導援助した事例

1 はじめに

「仲間はずれ」「無視」型の特徴

- いじめの態様別割合
小・中・高全体では20%と3番目、小学校では27.8%と最も多い。中でも3, 4年生の児童に高い割合で出現している（平成5年度文部省初等中等教育局調べ）。
- いじめる側の心理
遊び感覚で相手の困る姿を見て楽しみ、いじめの意識は希薄である。
- いじめられる側の心理
身体的な被害は少ないが、孤立化によって深い心理的ダメージを受けやすく、不登校などの重大な事態に追い込まれることもある。
- いじめられやすいタイプの子ども
 - ・不潔な感じのする子
 - ・わがままな子
 - ・動作の遅い子
 - ・気の弱い子

本事例は、早期発見と適切な指導援助により、「仲間はずれ」「無視」が解決された、小学校4年生女子のケースです。

2 問題の概要

- 2学期半ば、担任は、最近S子の表情が暗く、極端に無口になっていることに気づいた。
- 注意して観察すると、学級の子どもたちに、S子を避けている様子が見られた。
- 担任との面接で、S子は「A子たち数人の女子に無視されている。みんなも、それを知っていて、仲間はずれにする。毎日が地獄のようだ。

もう、学校なんか来たくない」と、胸の内を訴えてきた。

- 観察と面接から、S子に対する「仲間はずれ」「無視」のいじめは、よく言われる四重構造であることがわかった。

《S子へのいじめ四重構造》



3 指導援助の方針

担任を支援し、全職員で取り組むことを確認し、以下の指導援助の方針を立てた。

- (1) S子には、仲間はずれによる孤立化から著しく傷ついている心の安定を図る。
- (2) A子たちには、いじめを行う原因である本人たちのストレスを解消しつつ、S子の辛さに気づかせる。
- (3) 学級には、互いを認め合う学級づくりを通して、S子の孤立感を強めている「観衆」や「傍観者」をなくす。
- (4) 家庭には、事実を正しく伝え、解決に向けて連携を図る。